

Together



インタビューの詳細はこちら



パーキンソン病 でも前を向ける。

パーキンソン病と診断されて14年。薬を飲み、ウォーキングを続けながら、比較的安定した生活を送ってきた患者さんが「積極的なリハビリがあれば」と願いつけて見つけたのが、下関リハビリテーション病院のLSVT-BIGでした。6週間、午前と午後の1日2回のプログラムに取り組み、手足の動き、声、表情、そして長年悩まされてきた便秘まで改善。「本当に効果を実感できるリハビリに初めて出会えた」と語ります。心の不安も軽くなり、社会復帰を果たした患者さんの体験記をご紹介します。



私はパーキンソン病と診断されてから14年が経ちます。パーキンソン病は身体の症状だけでなく、心の問題が大きいて感じています。薬の副作用や振戦、眠れない夜、将来への不安に苦しむこともありました。そんな時、私と妻は病気を「パーちゃん」と呼び、「パーちゃんに負けるな!」を合言葉に前向きに取り組むようにしました。診断後も10年近く仕事を続け、医師の投薬指導に従いながら治療を継続してきました。そのおかげで、比較的経過は良好でした。しかし、心のどこかで「パーキンソン病に対する本格的なリハビリはないのだろうか」とずっと思っていました。そんな折、頸椎を痛めて手術を受け、回復期リハビリ病院への転院先を探していた時、下関リハビリテーション病院がパーキンソン病のリハビリに取り組んでいることを知りました。

入院後、LSVT-BIGのプログラムに参加。6週間、午前と午後の1日2回の体操に取り組みました。手足の動きが大きくなり、声もしっかり出るようになり、自分自身でもはっきりと変化を感じました。驚いたのは内臓



の動きも良くなり、長年苦しんできた便秘が改善されたことです。気分も軽くなり、「効果を実感できるリハビリ」に初めて出会えた喜びがありました。

下関リハビリ病院で出会った小川医師やリハビリスタッフ、看護師の皆さんの存在も大きかったです。医師は週に何度も病室を訪れ、科学的な展望と励ましを与えてくれました。リハビリ室では若いスタッフが自信をもって高齢患者に語りかけ、指導する姿に感銘を受けました。リハビリ室に響く「1・2・3・4・5」「できました!」「頑張ったね!」という声かけは、今も耳に残っています。あの声にどれほど励まされたことでしょう。

今回の経験を通じて「手だてを尽くせば前向きな変化は必ず作れる」という確信を得ました。パーキンソン病でも、動く喜び、声を出す喜び、前向きに生きる力を取り戻せることを、多くの人に知ってほしいと思います。LSVT-BIGはそのための大きな力になると、私は確信しています。

